NTT東日本札幌

手荒れ対策後評価を追加

内視鏡手術時の感染管理がより向上

NTT東日本札幌病院（吉岡成人院長・301床）は、臨床工学技士が内視鏡外科手術スコープオペレーター業務を開始するのに伴い、手洗い教育のラビング法習得プログラムを作成。さらに手荒れ対策後評価を加えたことで感染管理体制が向上するなど、チーム医療推進へ手術時の安心、安全がより高まる環境整備に努めている。

医師の働き方改革をきっかけに、同病院では2023年6月から臨床工学技士によるスコープオペレーター業務を導入。高い意識を持って感染管理に関わりたいと、感染管理推進室や看護部からもアドバイスをもらいながら、「ラビング法の習得」「解剖・術式理解」「スコープ操作訓練」「定期評価・改善」の体系的教育プログラムを実践している。

手荒れがラビング法の精度を妨げる要因であることが示唆されたことから、内視鏡の適切な保持・操作、無菌操作の順守、多職種連携等をより高めるために、手荒れ対策を追加して、24年1月から継続的な指導評価を実施。さらなる課題解決と深化に取り組んでいる。

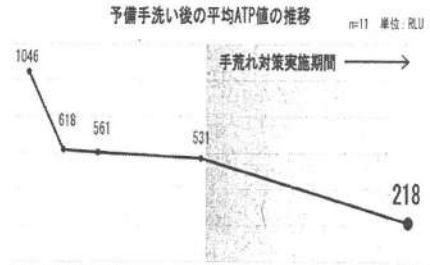
評価では、手洗い前ATP値測定→蛍光塗料塗布→塗り残しカウント→手洗い→洗い残しカウント→手洗い後ATP測定により、手首から指先まで72カ所に分割化して、清浄度、客観的な効果を見える化した。

さらに感染制御や保湿ケアの資料提供、啓発ポスター掲示、サイト閲覧推奨、定期的な勉強会、適切なタイミングでの指導など、保湿ケア教育を支援してきた。

24年1～11月の調査結果では、臨床工学技士（11人）のATP値が教育前1046RLU、教育後618RLU、1カ月後561RLU、4カ月後531RLU、10カ月後218RLUと低減、80%の大幅ダウンとなった。

流水石鹸による平均洗い残し数は教育前12・0個→10カ月後2・2個、消毒剤は7・5個→1・4個に減少。手荒れが認められた4人のうち、対策後3人の改善を確認。継続的な保湿ケア教育により、皮膚バリア機能が回復した。

取り組んできた須藤徹臨床工学技士は「強制的なチェックではなく、日常コミュニケーション内での自然な観察評価を心がけながら実践。職員の自主性を尊重した継続的なアプローチが習慣の確立に効果を上げている」と話している。



タスクシフト推進へ対策強化に取り組んでいる